

月見草について

坂田 よしみ

「月見草という花があるでしょう?」歌に何かありましたね「花は何色?」「黄色じゃないのですか」「黄色はマツヨイ草。本物の月見草は白い花なんだよ」「えっ、そうなんですか」

この会話は岡山県倉敷市の重井薬用植物園の名譽園長、古屋野寛先生と私の電話での話です。ワタシは健康食品を販売する会社に勤務していますが、入社してまだ間のない頃、名簿からたまたまお電話した古屋野先生とご縁をいただき、もう五年になります。時々お電話をするうち、原爆当時より長崎医大の再建に奔走してこられた元長崎医大・長崎大学長の古屋野宏平先生のご親戚であることや、現在九十歳ですがお元気に山野草の見学会やカルチャーセンターで講師をされておられるそうです。この御縁もあつて月見草のことを教えていただいたのです。

月見草は北アメリカ南部〜メキシコを原産地とするアカバナ科マツヨイグサ属の草木で、四月に種を播くと六月頃には夕方から夜にかけて高さ十センチ〜二〇センチ程の茎の上部に直径五センチ程度の真白な四弁の花を咲かせます。

本種は江戸時代の弘化四年(一八四七)に観賞用として渡来、しかし日本の気候に適合できず、当時の小石川御薬園(現在の小石川植物園)などで細々と栽培されるにとどまり、ほとんど姿を消してしまいました。



渡辺又日庵「新渡花葉図譜」
(国立国会図書館蔵)

次いで嘉永四年(一八五二)にやはり観賞用として渡来した南北アメリカ大陸を原産地とする同じアカバナ科のマツヨイ草は性質も強く野生化して生き残り、やがてこちらがツキミソウと呼ばれるようになりました。

現在でも小石川植物園で栽培さ

に、お金になる珍しい植物を求めて苗や種を持ち帰っていました。王の万能薬として、また観賞用植物として、ヨーロッパ各地に広がっていききました。

○江戸時代中期には医療が一般民衆にも普及し、当時医療の本流であった漢方に用いられる薬草木の需要が高まり、八代将軍吉宗の政策により、次々と薬園が開設されました。

○弘化四年、月見草が渡来したとされるこの年、長崎に唐船九隻、蘭船一隻(シエルトール・ヘンボス号)が入港。バタヴィアで落札して貿易権を獲得した賃借人デルプラットによる脇荷貿易で、本方貿易と違いオランダ人が持ち渡った商品を長崎会所において日本商人が直接入札する取引として積荷目録に月見草に関する商品名を探しましたが、この頃は輸入も定例化してきて品目内容も簡略化され、「葉種類」とだけありました。石田千尋先生によると、取引された品物以外の願請品、個人的に持ち渡った品物に関してはなかなか史料が残っていないのとこのことでした。

○弘化四年は長崎の西山に御薬園があつた頃で唐や西洋からの外来薬種苗を受け入れる中継地点であり、一旦すべてをここで栽培した後、半分を江戸の小石川御薬園や各地の薬園に三〜五名の薬園掛によって移送されていたそうです。

○出島の三学者、ケンペル、ツェンペリー、シーボルトらは日本に西洋の医薬学、植物学をもたらし、我が国の本草学の研究や薬園の発展に大きな影響を与えました。

○江戸の後期の旗本馬場大助の『遠西舶上画譜』や長崎でシーボルトより学んだ尾張の伊藤圭介編集の『植物図説』には「月見草の図・弘化四丁末年舶来ス」と記されています。尾張藩の家老渡辺又日庵の「新渡花葉図譜」にも月見草が描かれていました。

京都ではマツヨイソウ。江戸の花戸(花屋)ではユウゲシヨウ、または宵待クサ、ツキミソウ、と明治末に標準和名ができるまで、いくつもの名前と呼ばれていました。

○『小石川植物園前史』に、「長崎を通じて渡来する諸外国の植物が次第に増え、多くは薬草であつたが、中には薬にならないと思われる植物もあつた」と記してあります。

明治四年当時に栽培されていた植物の記録の中に、「マツヨイ草」の漢名の科名に「柳葉菜」と記してありました。(本協会協力会員)

れている本物の月見草の種を古屋野先生は知人を介して入手し、重井薬用植物園やご自宅で栽培、そしてその種を郵便で私の手元に送って下さいました。二年草〜多年草といわれていますが、長崎の気候には適合しているのでしょうか、南側のペランダにプランターで育てて三年になります。今年一月の大雪を被つても何のその、前年の株が元気だったのか三月頃から葉や茎が生長し、蕾が出来て四月の中頃から次々と花を咲かせています。夕闇のなか銀色に輝やく白さは、まさにお月さまを思わせませす。しかし、時間とともに紅に変し朝には萎んでしまう一夜限りの花です。

さて、長崎の光源寺で越中先生の「長崎よもやま話」に参加し始めてから、それまでは漠然と月見草は江戸で育てられてたぐらいに思っていたのですが、鎖国の時代にどうやって日本にやって来たのかと疑問がわいてきたのでした。そんな或る日、友人から「月見草は長崎の出島にオランダ船に乗ってやって来た」とPCに出てるよ」と知らせがあり、すぐ図書館に調査に行くと外山三郎先生の『花草木』や『長崎県大百科事典』『長崎事典歴史編』にもそう記してありました。

鎖国時代、外来文化を受け入れる唯一の窓口であつた長崎。長崎から江戸へ、そして「何百年の月日を経て、また長崎に帰って来たのね」と、思わずペランダの月見草たちに声をかけずにはおれませんでした。以来、私の月見草追跡調査が始まった次第です。その調査内容は次の通りです。

○月見草はマツヨイグサ属・種類はアメリカ大陸を中心に約二〇〇種が分布する。古代よりインディアンはその種類の中から、自然の治療薬として使用してきたようです。

○一六一四年。マツヨイグサ属の種類がヴァージニアからパドヴァ(ポルトガル)に渡ったことが、英国の植物学者ジョン・グッドイヤーによって一六二一年に記述されています。

○一七世紀頃からプラントハンターと呼ばれた人たちが、王族や貴族のため

風信

暑中お見舞申し上げます

七月一九日土用の入り、八月七日立秋。この日より初秋。

其の間、土用の丑の日は七月三十日でした。

一、長崎の八月と言えば九日の原爆忌。十三日より「お盆」、十五日夜は精霊流し。恒例により今年も「精霊流し実況放送」をさせて戴きます。(NBCテレビ)

一、十六日は光源寺「産女の幽霊御開帳(午前十時より三時)柳川大松下の水飴をいただき、寺町に下り三宝寺に行き、先ず閻魔堂の奪衣婆像を拝み「地獄図」を拝見。次いで本堂に行き有名な矢負本尊(伝鎌倉佛)を拝み、極楽浄土図を拝観させて戴けば極楽に往生するという。帰りは麴屋町の坂を下り幽霊井戸の跡をたしかめ、同町の麴で作った甘酒を買って帰ったと言う。

一、十七・十八日は八坂町・清水寺の「千日まいり」の日。この日に「お参りすると千日お参りした功德を授かる」という。昔、お接待には「人形薯をいただいた」とおききました。

一、二十八日より三十日まででは崇福寺(国宝)の中国盆、この様式の中国盆は現在の中国でも、殆ど見る事が無くなったそうである。説明がむずかしいので研究したい方は伊東涼子女士の「長崎華僑のポール(普度)」(長崎談叢九十二・三輯)を読まれるとよい。概説すると二十八日より三十日午前中までは精進料理が用意される水織経を主にした普渡で、三十日の夕方からは魚肉(豚)も供えられる焔口経を主にした大供養がある。そして最後は金山・銀山を燃やし其の火焰に乗せて諸霊を極楽に御送りするそうである。この中国盆を見学されたい方は、二十九日午後と三十日の夜に行かれるとよい。

一、八月中は本会の各講座は夏休みで休講。九月五日(月)より次のように開講いたしますので御自由に御参加下さい。

長崎学講座 毎週月曜午前十時半より。講師・毎回不同。(資料代二〇〇円)
古文書を読む会 毎月第一、第三火曜日の二回。午前十時半より正午(指導 川原・米田の各氏。後見 越中)

水曜懇話会 毎週水曜午後一時半より三時。(竹之下・江口・吉田・野口の各氏を中心に)

食文化を考えるサークル 毎月第二・第四金曜
午後二時より三時(脇山女史・太田氏を中心に)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所二F

